

サイエンスコミュニケーター だより

Volume 8, August, 2018



みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006 年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや 200 名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんとをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

サイエンスコミュニケーターの声

「えっ、科学なの？」と言われがちな心理学のサイエンスコミュニケーション

みなさんは、心理学といたら何を思い浮かべますか？ カウンセリング、心理テスト、それから……文系なのに「科学」博物館とどんな関係があるの？と思う方もいらっしゃるかもしれません。

確かに、特定の個人の心を対象とする応用的な領域では、科学的であることよりもその個人の主観を大事にすることがあります。しかし心理学の多くの領域では、たくさんの人（ときにはほかの動物）を対象に実験をして、人の行動の一般的な法則を明らかにすることを目指しています。この意味では、心理学は科学です。「心理学」とひとくくりにされていますが、研究の対象や方法は多様なのです。

私は大学で心理学の研究と教育に携わっています。大学の授業は、心理学についてのサイエンスコミュニケーションの場の 1 つです。具体的な研究を紹介したり、デモンストレーションをしたりしながら、心理学がどういうものかを紹介します。授業の感想でよく「思っていた心理学と違った」と言われますが、「思っていたのとは違ったけど面白かった」と言ってもらえると、ほっとします。

しかし、授業の場以上にサイエンスコミュニケーションとしての工夫が必要だと感じるのは、実は、ふだんの会話です。心理学の研究者であることが知られると、「じゃあ私の心が読めるの？」と期待の目を向けられたり、「身近に心の病気っぽい人がいるんだけどどうすればいいの？」「どうしたら片思いの相手に好かれるの？」などと具体的な問題に対する答えを求められたりします。いい加減なことを言うわけにはいきませんが、遊びに行く道中での雑談といったみんなが楽しんでいる場面で、あまり厳密な話をすると、興ざめさせてしまいかねません。どうしても譲れない時には興ざめを承知で誤解を正すこともありますが、私もせつかくの楽しい時間をあえて台無しにしたいはありません。手短に、適切に、しかもできれば面白く、会話中に不意打ちで繰り出される「お題」に心理学者として答え

る。正直なところ、うまくできた！と思えた経験はほとんどありませんが、イベントを開いたり展示を作ったりするだけでなく、日常のコミュニケーションに科学としての心理学を紛れ込ませることは、今の私ができるサイエンスコミュニケーション活動の重要な 1 つだと思っています。

最近特に悩んでいるのは、再現性の問題をどう語るかという点です。心理学（特に社会心理学）の実験は、他の人が同じやり方で実験をした時に同じ結果が再現されないことが多く、最近このことが問題になっています。実験結果が再現されることは、科学の重要な要件です。その要件が満たされないと、心理学は科学とはいえないこととなります。一方、いわゆる理系の分野でも、再現性が得られないことがままある、という調査もあります。もちろん、再現性の低い分野が他にもあるから心理学もこのままでよいということはありません。古いや思想ではなく「科学」であろうとする限り、再現性の問題は避けて通れません。科学としての心理学の研究はどうあるべきか、そしてそれをどう説明すべきか、今は大きな転換期を迎えているように思います。再現性の問題は、心理学だけでなく科学とはどういうものかを知ってもらうにはある意味うってつけの話題だと思うのですが、何を、どこまで、どのように話すのがよいか、悩みは尽きません。



武田 美亜



実験状況の一例。マジックミラー越しに 2 人でやりとりをさせて、相手に対する認知を調べる。

国立科学博物館認定サイエンスコミュニケーター（5 期）。現在、青山学院女子短期大学准教授。専門は社会心理学、ヒトと動物の関係学など。趣味はスキューバダイビング。最近、日本安全潜水協会認定アンダーウォーター・インタープリターとしての活動も模案中。

活動紹介

科博 SCA の会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、科博 SCA 会員が科博と共催したり学会企画の一環として実施したコラボイベントなどをご紹介します。

シンポジウムを開催しました！

「動物を見る、見せる～ミュージアムからフィールドへ」



動物園や博物館で動物を見る体験は、生物の生息域や生態系の保全につながるのでしょうか？その可能性について考えるシンポジウムを開催しました。多摩動物公園の坂本氏、千葉中央博物館の平田氏、帝京科学大学の並木氏、長野県環境保全研究所の陸氏から、実務者・研究者それぞれの視点でご講演いただきました。その後、国立環境研究所の久保氏がコーディネータとなり、ディスカッションを行いました。学会企画の一つとして開催したものでしたが、学会員ではない研究者や学生、一般の方にもご来場いただき、質疑を交えて議論が進みました。学会でもサイエンスコミュニケーション活動が求められていることを感じたシンポジウムでした。

(SC 講座 11 期修了生 三ツ井聡美)

親子向け科学イベントを開催しました！

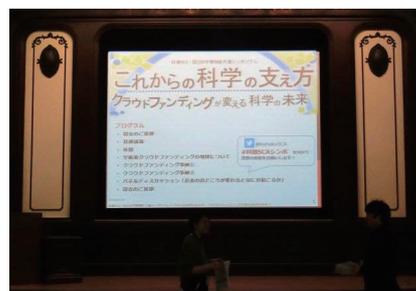


千代田区番町の庭にて開催された「さくらフェスタ」に、「尿素を使って枯れ木に花を咲かせましょう」というタイトルで出店しました。尿素の再結晶化のプロセスを、子ども向けに工作も交えてアレンジしたものです。ルーペを使うと結晶が少しずつ成長する様子が観察でき、子どもたちが驚いていました。作った結晶はおうちに持ち帰っていただきます。結晶がどんどん大きく育つ過程を、親子で共有してもらっていると嬉しいです。SCOPE が携わったイベントは 4 回目。今後も、親子で楽しめる科学イベントをたくさん開催する予定です。

(科博 SCA SCOPE 明石雅子)

「これからの科学の支え方 - クラウドファンディングが変える科学の未来 -」 開催報告

インターネット上で資金を募集し支援を受けることができるクラウドファンディングをご存知でしょうか？近年ではこの手法が科学研究にも取り入れられてきていますが、それが科学にどのような変化をもたらすのかを多くの方と考える機会を作りたいと思いました。そこで科博 SCA 有志で国立科学博物館との共催事業として 2018 年 2 月 18 日に国立科学博物館でクラウドファンディングをテーマにしたシンポジウム「これからの科学の支え方 - クラウドファンディングが変える科学の未来 -」を開催しました。



本シンポジウムでは、まず、クラウドファンディングで研究資金を募った「3 万年前の航海 徹底再現プロジェクト」代表の、国立科学博物館 海部陽介先生に基調講演をいただきました。続くパネルディスカッションでは、海部先生に加え、会社勤めのかたわら専門の複顔研究および作品作成のためにクラウドファンディングに挑戦した SCA 会員の戸坂明日香さん、博士課程の大学院生で自身の古生物研究を推進するためにクラウドファンディングに挑戦した山下桃さん、学術系クラウドファンディングのプラットフォーム「academist」運営者の柴藤亮介さんにご登壇いただきました。プロジェクトの規模や立場が異なる方にお集まりいただいたおかげで、様々な視点からお話を伺うことができました。



挑戦者のみなさんは支援者とのつながりをそれぞれ感じており、そこで生まれる科学的対話の意義は双方にとってとても貴重なものと感じました。参加者の方々からは、研究者だけではなく一般に開かれてゆく科学を楽しみとする声、研究者に求められる能力の変化を感じる声などがある一方、分野の偏りや質の担保などを懸念する声もあり、これからの科学に思いを馳せる機会となったのではと思います。また、開かれつつある科学に対して、我々サイエンスコミュニケータは何ができるかも問われているように感じました。

(科博 SCA クラウドファンディング WG 水川薫子)